

[成果情報名] 「不知火」 幼木の生育と適正 EC（電気伝導度）

[要約] 「不知火」 幼木の生育は、EC、0.5 ～ 0.9mS/cm が適正範囲であり、EC 1.0mS/cm を超えると濃度障害を生じ生育が劣る。

[キーワード] 不知火、EC、適正範囲、濃度障害

[担当] 長崎県果樹試験場・施肥改善科

[連絡先] 電話 0957-55-8740

[区分] 九州沖縄農業・果樹

[分類] 指導

[背景・ねらい]

中晩生カンキツ「不知火」は食味良好な果樹として栽培されているが、樹勢の低下を来しやすい果樹でもある。商品性を高めるための大玉果の生産を目的とした年間施肥量が多いことも樹勢低下の一因と考えられる。そこで、施肥量と「不知火」の生育について検討した。

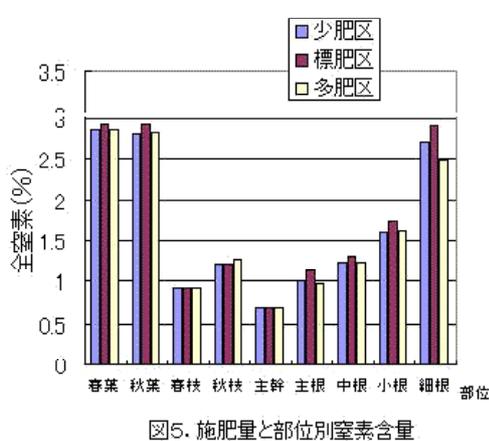
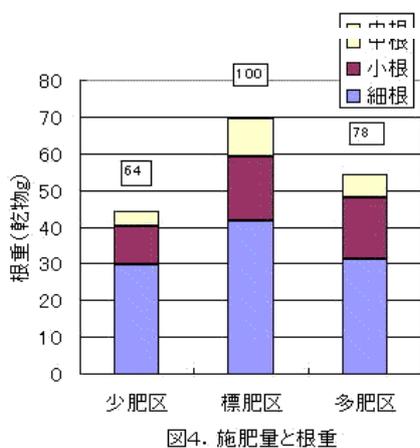
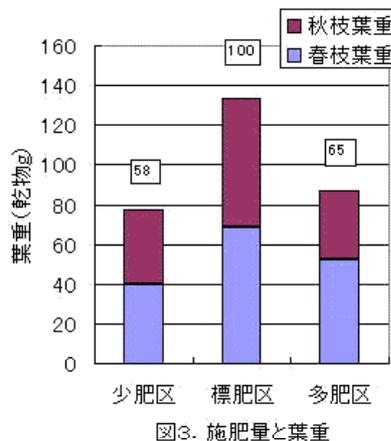
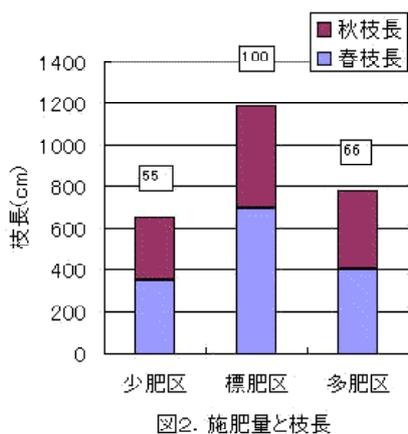
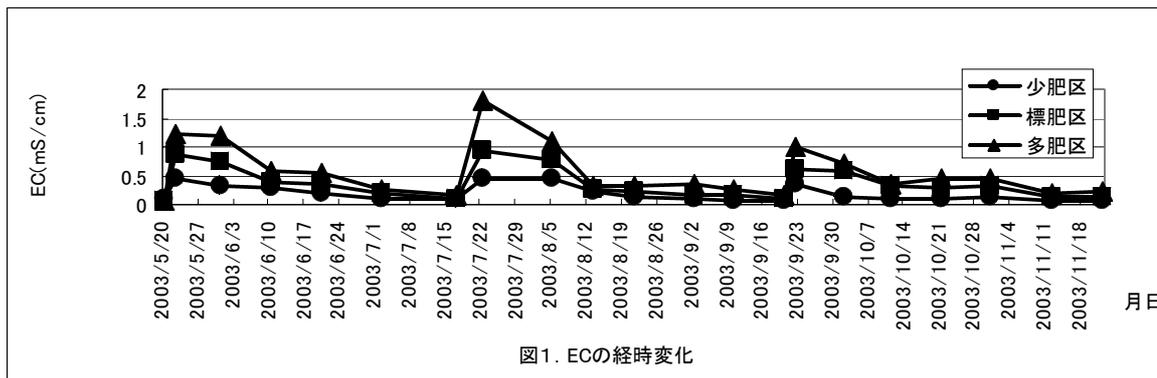
[成果の内容・特徴]

- ① 土壌の EC 値は施肥直後に上昇し、多肥区では EC 1.0mS/cm を超える時期がみられた (図 1)。
- ② 春及び秋の枝長は標準区が最も長く、少肥区は明らかに短かった。多肥区は枝の伸長が抑制されていた。春枝及び秋枝に着生した葉重についても同様の結果であった (図 2、図 3)。
- ③ 根重は細根の割合が最も高く、少肥区の細根の割合が高かった。全根重は標肥区が最も重く、多肥区、少肥区の順に重かった (図 4)。
- ④ 各部位別の全窒素含量は葉と細根で高く、主幹で最も低かった。処理別では標肥区で高く、多肥区で高いのは秋枝だけであった (図 5)。

[成果の活用・留意点]

- ① 「不知火」の幼木を用いた結果であり、成木については根域が拡大しているため更に検討する必要がある。
- ② 土壌の EC 値は施肥量だけではなく土性によっても異なるので現地での土性を考慮する必要がある。

[具体的データ]



供試樹：「不知火」1年生苗 2002年3月18日定植
 土壤条件：細粒黄色土 大原統（母材 安山岩系玄武岩）
 処理内容：少肥区（N-15.0kg/10a）、標肥区（N-20.0kg/10a）、多肥区（N-60.0kg/10a）
 供試肥料：磷硝安加里 S811(18-11-11)を5月20日、7月19日、9月20日の3回に分施

[その他]

研究課題名：中晩生カンキツ「不知火」の高品質果実連年安定生産技術の組立実証試験
 予算区分：県単（新営農）
 研究期間：平成14年度（平成13～14年）
 研究担当者：井手 勉・後田経雄・種川淳子
 既発表論文等：なし